

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ケンサキイカ

学名 *Loligo edulis*

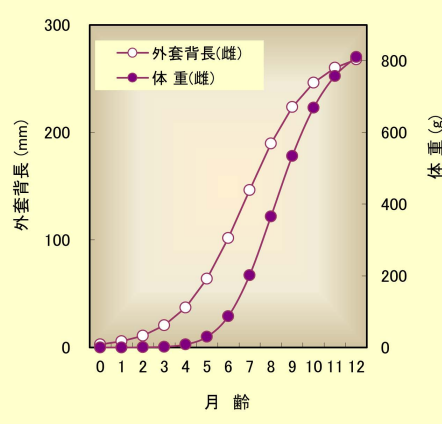
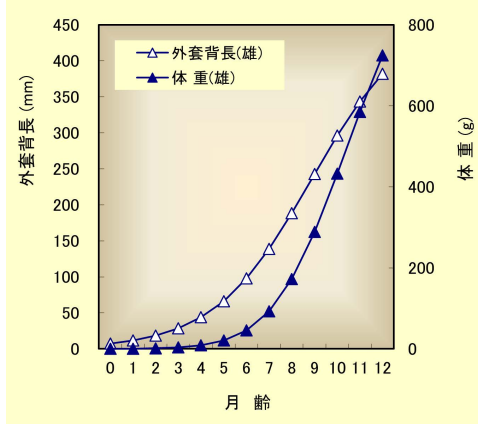
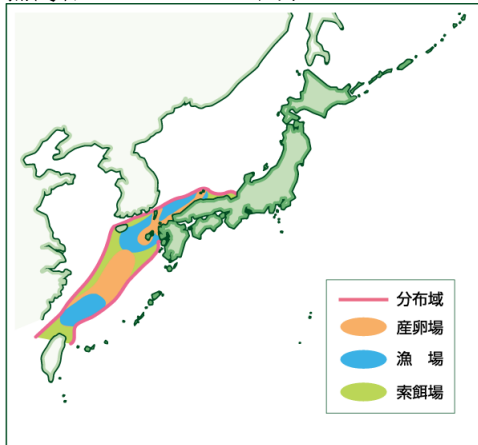
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 1年
成熟開始年齢: 外套背長70～80mm(約5カ月)
産卵期・産卵場: 周年産卵するが、産卵盛期は春～秋季
索餌期・索餌場: 分布域全体、複数の発生群が存在し、それぞれに回遊経路は異なると考えられている
食性: 小型の魚類、甲殻類、軟体類
捕食者: 不明

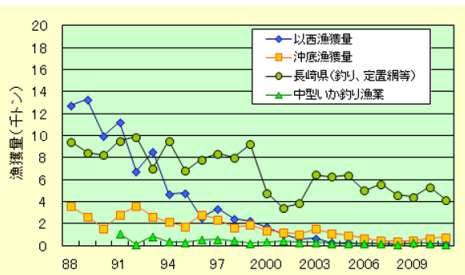
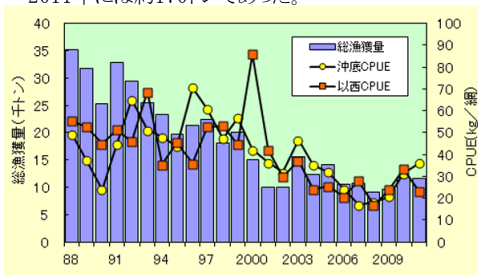


漁業の特徴

沿岸域では主にいか釣り漁業によって漁獲される。沖合域では底びき網漁業が主体となり、沖合底びき網漁業(以下、沖底)では長崎県沖合～山陰沖の広範囲に漁場が形成される。東シナ海では主に以西底びき網漁業(以下、以西)により漁獲されていたが、2004年以降、主要な漁場であった東シナ海南部に、以西はほとんど出漁しなくなった。1991年からは東シナ海において中型いか釣りによる操業が6～10月にかけて行われる。

漁獲の動向

日本海西部～東シナ海における本種の漁獲量は1988年には3万トンを超えていたが、変動しながら減少し、2001年以降は1万トン前後の漁獲量となった。九州西岸～日本海西部にかけては1988年の2.4万トンから変動しながら減少し、2011年は1.1万トンであった。一方、東シナ海南部は1988年には1.1万トンの漁獲量であったが、減少が続き、2011年には約170トンであった。



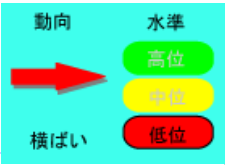
資源評価法

以西、沖底、中型いか釣り漁業、および沿岸域でのいか釣り漁業の漁獲動向から資源動向を判断した。沖底ではCPUE(網数あたり漁獲量)を資源動向の指標とした。以西でも努力量が急減していることから、2003年のケンサキイカ

有漁漁区について過去にさかのぼって漁獲量と努力量を計算し、CPUEの経年変化を分析した。沿岸域については各県代表港のいか釣り漁業CPUEおよび漁獲量を、資源状態の指標とした。

資源状態

2011年には沖底CPUEは上向いたが、以西ならびに東シナ海南部で主に操業する中型いか釣り漁業のCPUEは減少した。さらに、各県代表港におけるいか釣り漁業では、漁獲量は長崎県の対馬海域を除いておおむね中～低水準とみられ、最近5年間(2007～2011年)のこれらのCPUEの動向は横ばい～増加傾向であった。主要漁業のCPUEを総合して算出した来遊量指数も、最近5年間でみると横ばい傾向である。1988年以降の日本海西部～東シナ海における漁獲量の推移から、現在の資源水準は低いと考えられる。



管理方策

ケンサキイカ資源には複数の季節発生群が存在することが知られており、豊度の高い発生群を利用し、豊度の低い発生群を守る管理が理想的である。2004年以降はかつて主要な漁場となっていた東シナ海南部における漁獲量が落ち込んでいるが、この海域には中国船も多数出漁しており、漁獲の実態を把握するのは困難である。現状では資源の指標値にあわせて漁獲することが現実的であろう。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	122百トン	$1.0 \cdot C_{2011} \cdot 1.05$	—	—
ABCtarget	97百トン	$0.8 \cdot 1.0 \cdot C_{2011} \cdot 1.05$	—	—

- 平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABClimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCtarget = \alpha \cdot ABClimit$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、 k は係数(標準値の1.0)、 b と l は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 2004年以降以西底びき網漁業は東シナ海南部漁場にはほとんど出漁せず、この海域における漁獲量が落ち込んだ

管理方策のまとめ

- 現状では資源量の指標値に合わせて漁獲を行なう
- 東シナ海全域での資源状態の正確な把握には、関係国間の協力が必要である

執筆者: 依田真里・福若雅章

資源評価は毎年更新されます。